

沖縄・首里方言の規則動詞の形態音韻論：試論

有 元 光 彦

0. はじめに

本稿の目的は、沖縄・首里方言の規則動詞の活用形を対象とし、それに形態音韻的な観点からの記述を試みることである。

従来琉球諸方言の研究は莫大な数にのぼり、音韻的な面や文法的な面から様々なアプローチが成されている。しかし、私が見る限りでは、それらの研究は単語レベルの現象を表面的に観察したものが殆どである。例えば、音声面では、ある単語における単音を方言間で対照し、ある方言ではその単音が存在するか、またはそれが別の音声と対応しているとかの問題しか扱っていない。勿論、このような対照も基礎的で必須のものであり、また内間(1970)・多和田(1973)など動詞の活用形を形態音韻的な立場から記述した報告もない訳ではないが、結局は両者ともかなり表面的なレベルでの分析をしている。

本稿では、「言語」は辞書(語彙, lexicon)と様々なレベルの文法規則(rule)から成り立っているという立場を取る。辞書に関しては、どのような情報をそこに組み込んでおくかの問題はあるにしろ、かなり言語(方言)固有(language-particular)な要素が多い。一方、文法規則に関しては、言語固有なものと言語普遍的(language-universal)なもの両方が存在している。しかし、それを判断するためには、その言語がどのような規則の集合体によって構成されているのかを厳密に記述する必要がある。本稿では、このような記述を動詞活用形といった狭い範囲に適用し、動詞が活用する際にどういった音韻規則が働くかについて考察する。このような生成音韻論的な立場に立つ報告を寡聞にして聞いたことがないので、ここでは一試論として私の考えを提出する。

1. 動詞語幹について

ここでは、『沖縄語辞典』で「規則動詞」と呼ばれているものだけを対象とする。動詞の語幹は、その活用形から、次のように分類できる。(注1)

- (1)a. 子音語幹動詞(語幹末子音はm、b、s、k、g、t、d、r、nの9種)

例：yum-〈読む〉、tub-〈飛ぶ〉、sas-〈刺す〉、
kak-〈書く〉、nug-〈脱ぐ〉、tat-〈立つ〉、
kand-〈被る〉、tur-〈取る〉、Sin-〈死ぬ〉

- b. 母音語幹動詞(語幹末母音はiのみ)

例：çi-〈着る〉、?uki-〈起きる〉

c. 強変化動詞

kund- ~kunc- <くびる>

nnd- ~nu- <見る>

s- ~si- ~Qs- <する>

?ik- ~?n- <行く>

č(u)- ~ku- ~Qč- <来る>

上村 (1972: 34) には「奄美沖縄方言群では弱変化動詞 (一二段活用動詞) はことごとくラ行の強変化動詞 (五段活用動詞) へ移行した」(注2) という記述が見られるが、後の分析から分かるように、母音語幹動詞には i 語幹動詞 (語幹末分節音 (stem-final segment) が /i/ である動詞) が存在する。(注3)

2. データ

ここで用いるデータは全て文献から引用したものであるため、形態音韻論的な分析にとってはデータが不足している箇所がある。従って、全ての活用形を挙げることはできない。現時点ではそれを補うだけの資料を持ち合わせていないため、「データ不足だ」と述べておくしかない。しかし、その旨を明確に述べることによって、問題のありかを明示できるばかりでなく、従来の調査で漏れていた部分も明らかにできることは確かである。

r 語幹動詞に関しては、語幹末子音 /r/ の直前の母音が重要な役割を果たすので、他の動詞よりも多めにデータを挙げてある。

以下のデータでは、一番左に基底形 (underlying form, UF)、真ん中に音声形 (phonetic form, PF)、< > の中には大体の意味を記した。(注4)

2. 1. 「~する」の形 (肯定普通態現在の「終止形」)

sas-yUN	sasUN	<刺す>
tub-yUN	tubUN	<飛ぶ>
yum-yUN	junUN	
	jumUN	
	jumjUN	<読む> (注5)
Sin-yUN	finUN	<死ぬ>
kak-yUN	kačUN	<書く>
nug-yUN	nužUN	<脱ぐ>
tat-yUN	tačUN	<立つ>
kand-yUN	kanžUN	<被る>
tur-yUN	tujUN	
	tuIN	<取る> (注6)
warar-yUN	warajUN	<笑う>

koor-yuN	ko:juN	<買う>
keer-yuN	ke:juN	<帰る>
čir-yuN	čijuN	<切る>
?irir-yuN	?irijuN	<入れる>
?uki-yuN	?ukijuN	<起きる>
či-yuN	čijuN	<着る>

まずこの活用形の接辞の基底形であるが、母音語幹動詞 /či-/ <着る> が [čijuN] として現れることから、/ -yuN/ と設定できるだろう。r 語幹動詞では、接辞初頭音 /y/ の直前で語幹末子音 /r/ が消去されると考えれば、うまく行くようである。即ち、次の規則が必要となる。

(2) r 消去規則

$$r \rightarrow \phi / \text{---} - \left[\begin{array}{l} -\text{back} \\ +\text{high} \end{array} \right]$$

s、b、m 語幹動詞では、例えば /sas-yuN/ → [sasun] <刺す>、/tub-yuN/ → [tubun] <飛ぶ> 等となることから分かるように、形態素境界を挟んで語幹末子音の直後の /y/ は消去される。即ち、次のような規則が仮定できる。

(3) y 消去規則

$$y \rightarrow \phi / C - \text{---}$$

この規則によって、s、b、m 語幹動詞はうまく記述することができる。但し、規則(3)は(2)よりも後に適用されなければならない。

次に k、g 語幹動詞であるが、これらはそれぞれ /k-y/、/g-y/ の部分が [č]、[ž] となっている。ここで思い出されるのは、英語などにも良く見られる軟口蓋音軟化 (Velar Softening) という現象である。これは、前舌・非低舌音の直前で k → s、g → dʒ の交替が起こるといえるものである。ここでは、これに良く似た現象が起こっているものと考えられる。次のような規則を仮定する。

(4) 軟口蓋音軟化

$$\left[\begin{array}{l} k \\ g \end{array} \right] \rightarrow \left[\begin{array}{l} \check{c} \\ \check{z} \end{array} \right] / \text{---} - \left[\begin{array}{l} -\text{back} \\ +\text{high} \end{array} \right]$$

この規則は、(3)よりも先に適用されなければならない。そうすることによって、次のような派生を辿ることになる。

(5) UF	/kak-yuN/	/nug-yuN/

(4)	kač-yuN	nuž-yuN
(3)	kač- un	nuž- un

PF	[kačun] <書く>	[nužun] <脱ぐ>

t、d 語幹動詞については、/tat-yun/ → [tačun] <立つ>、/kand-yun/ → [kanžun] <被る>の例から分かるように、それぞれ /t-y/ → [č]、/d-y/ → [ž] となっている。そこで、次のような規則が考えられる。

(6) 歯音口蓋化

$$\begin{bmatrix} +\text{cor} \\ -\text{son} \end{bmatrix} \rightarrow [+high] / \text{---} - \begin{bmatrix} -\text{back} \\ +high \end{bmatrix}$$

勿論、規則(6)の後に(3)が適用される。

2. 2. 「～しない」の形 (否定普通態現在の「終止形」)

sas-an	sasan	<刺さない>
tub-an	tuban	<飛ばない>
yum-an	juman	<読まない>
Sin-an	finan	<死まない>
kak-an	kakan	<書かない>
nug-an	nugan	<脱がない>
tat-an	tatan	<立たない>
kand-an	kandan	<被らない>
tur-an	turan	<取らない>
warar-an	wararan	
	wara:n	<笑わない> (注7)
koor-an	ko:ran	<買わない>
keer-an	ke:ran	<帰らない>
čir-an	čiran	<切らない>
?irir-an	?iriran	<入れない>
?uki-an	?ukiran	<起きない>
či-an	čiran	<着ない>

この活用形の接辞は /-an/ である。子音語幹動詞の場合はそのまま接辞が付くだけであるから問題はない。しかし、母音語幹動詞 (i 語幹動詞) の場合は、この活用形るとき、r 語幹化 (いわゆるラ行五段化) する。従って、/?uki-/ <起きる>、/či-/ <着る> などでは、語幹末母音の直後に /r/ が挿入される。(注8)

2. 3. 「～した」の形 (肯定普通態単純過去の「終止形」)

sas-tan	sačan	<刺した>
tub-tan	tudan	<飛んだ>
yum-tan	judan	<読んだ>
Sin-tan	fižan	<死んだ>

kak-taŋ	kaçaŋ	<書いた>
nug-taŋ	nužaŋ	<脱いだ>
tat-taŋ	taččaŋ	<立った>
kand-taŋ	kantaŋ	<被った>
tur-taŋ	tutaŋ	<取った>
warar-taŋ	warataŋ	<笑った>
koor-taŋ	ko:taŋ	<買った>
keer-taŋ	ke:taŋ	<帰った>
čir-taŋ	čiččaŋ	<切った>
?irir-taŋ	?ittaŋ	<入れた>
?uki-taŋ	?ukitaŋ	<起きた>
či-taŋ	čičaŋ	<着た>

この活用形の接辞の基底形は、母音語幹動詞などから、/ -taŋ/ と仮定できる。まず分かることは、「語幹末子音-接辞の初頭音」の部分が [t], [tt], [č], [čč], [d], [z] のいずれかになっていることである。そこで、当該部分の音声形によって、【表1】のように分類してみる。

【表1】

	r 語幹動詞以外 の子音語幹動詞	r 語幹動詞	i 語幹動詞
[t]	kand- <被る>	tur- <取る> warar- <笑う> koor- <買う> keer- <帰る> (注9)	?uki- <起きる> ?tati- <立てる> ii- <貰う>
[tt]		?irir- <入れる> hwirir- <拾う>	
[č]	sas- <刺す> kak- <書く>		či- <着る> ni- <煮る> i- <座る>
[čč]	tat- <立つ>	čir- <切る>	

		?ir- <入る> kir- <蹴る>	
[d]	tub- <飛ぶ> yum- <読む>		
[ʒ]	Sin- <死ぬ> nug- <脱ぐ>		

【表1】からも分かるように、ここでは動詞を3種類に分けて考える。中心的な問題は接辞初頭音 /t/ が有声音 (voiced) / 無声音のいずれで現れるか、及び口蓋化 (palatalization) 音 / 非口蓋化音のいずれで現れるかの二点にあるようである。

まず、口蓋化 / 非口蓋化の対立から見て行く。具体的には、非口蓋化音 [t]、[tt]、[d] で現れるか、口蓋化音 [č]、[čč]、[ʒ] で現れるかのいずれかである。【表1】から分かるように、語幹末子音が /s/、/k/、/t/、/n/、/g/、/r/ であるとき、口蓋化音 [č]、[ʒ] で現れている。これら6つの語幹末子音はおおよそ [-labial] (非唇音性) で表せられることから、以下のような規則を仮定できる。

(7) /t/ 口蓋化規則A

$$t \rightarrow [+high] / [-labial] - \overset{C}{\text{---}}$$

但し、注意すべきことは、[-labial] というグループには /d/ も /r/ も含まれていることである。d 語幹動詞及び /tur-/ <取る> などの r 語幹動詞では [t] が現れるため、規則(7)の適用を免れなければならない。そこで、規則(7)よりも前に、語幹末子音 /d/、/r/ を消去するような規則を設定する必要がある。次の規則(8)を仮定する。

(8) d、r 消去規則

$$\begin{cases} d \\ r \end{cases} \rightarrow \phi / \text{---} - t$$

このようにすることによって、規則(7)に例えば「語幹末子音 C ≠ /d/、/r/」のような但し書きを付けなくて良いことになる。

次に、r 語幹動詞における口蓋化について見てみる。まず、/tur-/ <取る>、/?irir-/ <入れる> などでは口蓋化は起こっていない。(注10) 口蓋化が関わるのは、/čir-/ <切る>、/?ir-/ <入る> などの一音節語幹を持つ動詞である。また、この現象は i 語幹動詞でも同様に起こる。即ち、一音節語幹動詞では口蓋化音 [č] が現れる。従って、r 語幹動詞にも i 語幹動詞にも適用できるように、次のような規則を仮定する。

(9) /t/ 口蓋化規則 B

語幹末子音 /r/ の直前が /i/ である r 語幹動詞及び i 語幹動詞では、その語幹の音節数が一音節のときに（長母音音節語幹は除く）、接辞初頭音 /t/ は口蓋化する。（注11）

ここで、規則(9)の適用順序を考えてみる。先に規則(8)を仮定したが、/çir-/ <切る>などの動詞では語幹末子音 /r/ が(8)によって消去されてはいけないので、規則(9)は(8)よりも先に適用されなければならない。

r 語幹動詞に関して残る問題は、/çir-/ <切る>などでは [çç] で現れているということである。t 語幹動詞でも同様の現象が起こっていることから、次のような逆行同化規則が考えられる。

(10) 逆行同化規則

$$\left\{ \begin{array}{l} t \\ r \end{array} \right\} \rightarrow \check{c} / \text{---} - \check{c}$$

次に問題となるのは、有声/無声の対立である。【表1】からも分かるように、語幹末子音が /s/, /k/, /t/, /d/, /r/ のときには無声音 [t], [tt], [ç], [çç] のいずれか、/b/, /m/, /n/, /g/ のときには有声音 [d], [z] のいずれかになっている。従って、次のような規則が必要となる。

(11) 順行同化規則

$$C \rightarrow [+voiced] / \overset{C}{[+voiced]} - \text{---}$$

この規則は語幹末子音が有声であれば接辞初頭音も有声になるという規則であるが、語幹末子音が /d/, /r/ のときには、この規則が適用されてはいけない。語幹末子音 /d/, /r/ は規則(8)で消去されるので、規則(11)を(8)の後に順序付ければ良い。

最後に残った作業は、語幹末子音 /s/, /k/, /b/, /m/, /n/, /g/ を消去することである。次のような規則を仮定する。

(12) 語幹末子音消去

$$C_1 \rightarrow \phi / \text{---} - C_2 \quad (C_1 \neq C_2)$$

この規則には但し書きが付いているが、これは t 語幹動詞及び /çir-/ <切る>などの r 語幹動詞への適用を阻止するためである。

以上「～した」の形に適用される規則を見てきたが、ここでそれらの規則の適用状況を見ておく。【表2】は、「語幹末子音-接辞初頭音」の派生過程を示したものである。

【表2】(注12)

UF	d-t	s-t	k-t	b-t	m-t	n-t	g-t	t-t	r ₁ -t	r ₂ -t	i ₁ -t	i ₂ -t
(9)										r-č		i-č
(8)	-t								-t			
(7)		s-č	k-č			n-č	g-č	t-č				
(10)								č-č		č-č		
(11)				b-d	m-d	n-ž	g-ž					
(12)		-č	-č	-d	-d	-ž	-ž					
PF	t	č	č	d	d	ž	ž	čč	t	čč	it	ič

2. 4. 「～し」の形 (肯定普通態の「連用形」)

sas-i	sasi	<刺し>
tub-i	tubi	<飛び>
yum-i	jumi	<読み>
Sin-i	fini	<死に>
kak-i	kači	<書き>
nug-i	nuži	<脱ぎ>
tat-i	tači	<立ち>
kand-i	kanži	<被り>
tur-i	tui	<取り>
warar-i	warai	<笑い>
koor-i	koi	<買い>
keer-i	kei	<帰り>
čir-i	či:	<切り>
?irir-i	?iri:	<入れ>
?uki-i	?uki:	<起き>
či-i	či:	<着>

この活用の接辞は /-i/ であると仮定できる。この活用形には直後に du suru という形が付いて、<～するのだ>というような意味になることが津波古 (1992) で述べられているが、金城・服部 (1959) の「連用形」と同じ形であるので、後者の形のまま挙げた。

ここで問題となるのは、r 語幹動詞である。ここでは、形態素境界を挟んで接辞 /i/ の直前で語幹末子音 /r/ が消去されているが、これは規則(2)によって記述することができる。

次に k、g 語幹動詞では、語幹末子音の部分がそれぞれ [č]、[ž] で現れている。これは前述の規則(4) (velar softening) で説明できる。形態素境界を挟んで /i/ ([+high, -back]) の直前にある /k/, /g/ は、それぞれ [č]、[ž] と交替する。

また、t、d 語幹動詞では、/t-i/ → [či]、/d-i/ → [ži] の交替が起こっているが、こ

れらは規則(6)によって記述できる。規則(6)では形態素境界が重要な役割を果たすので、「～して」の形の接辞 /-ti/ や /tati-/ <立てる>などの語幹では、この規則は適用されない。

2. 5. 「～して」の形（肯定普通態の「分詞」）

nas-ti	nači	<産んで>
tub-ti	tudi	<飛んで>
yum-ti	judi	<読んで>
Sin-ti	jiži	<死んで>
kak-ti	kači	<書いて>
nug-ti	nuži	<脱いで>
tat-ti	tačči	<立って>
kand-ti	kanti	<被って>
tur-ti	tuti	<取って>
warar-ti	warati	<笑って>
koor-ti	ko:ti	<買って>
keer-ti	ke:ti	<帰って>
čir-ti	čičči	<切って>
?irir-ti	?itti	<入れて>
?uki-ti	?ukiti	<起きて>
či-ti	čiči	<着て>

この活用形の接辞は /-ti/ と仮定できる。接辞初頭音の分布は「～した」の形と同じである。また、適用される規則も「～した」の形の場合と同じなので、ここでは省略する（2.

3. 参照）。

3. まとめ

以上、僅かではあるが5つの活用形を提示し、それに形態音韻論的な分析を加えていった。首里方言では、「～する」「～しない」「～して」の三つの形が分かれば、他の活用形などはこれから類推できるのではあるが（『沖縄語辞典』P. 58）、なにぶん挙げてある動詞の数も少ないため、データとしての価値はあまり期待できないかも知れない。また、ここで定式化した規則も暫定的なもので、その一つ一つについて妥当性を検討できていないのも事実である。

ただ、私の焦点は「言語」は規則の束から成り立っている、従って言語・方言間の違いと言った場合、規則のどの部分が違っていることなのか、それともある規則が欠けていることなのか、逆に多いことなのか」などという問題を解決することにあるため、本稿は以上のことを琉球諸方言で実証するための最初の一試論である。従って、様々な諸方言と対照させていく内に、ここで挙げた諸規則の中には改訂を加えないといけなくなるようなものも勿論出てくるだろう。それらは全て今後の研究に期することにする。

【注】

- (1) Sin-〈死ぬ〉は、『沖繩語辞典』(p. 63, 65) ではこの活用を示すものが一つしかないということで不規則動詞に入っているが、津波古(1992:842-3)では規則動詞に入っている。本稿では、後者に従って規則動詞として扱う。kund-〈くびる〉は語幹末子音が /d/ であるが、d 語幹動詞とは異なる活用を起こす。これと同じ活用を起こす動詞は他にはないので(津波古 1992:842)、強変化(不規則)動詞に含める。強変化動詞の基底形はかなり暫定的で、不明な点も多い。また、各種記号の解説は注4を参照のこと。
- (2) 上村氏の言う「強変化動詞」は規則動詞を指し、私の言うそれは不規則動詞を指している点で、使い方が異なる。
- (3) 但し、明確に i 語幹動詞とみなすことが出来るものは、語幹が一音節である動詞に限られる。詳細は注9を参照のこと。
- (4) 以下、活用形の名称は、『沖繩語辞典』のものをそのまま使わせてもらう。勿論、便宜上のものである。基底形を記号 / / で、音声形を記号 [] で括って示すが、文脈上明らかな箇所では省略する。記号 - は形態素境界(morpheme boundary)を示す。Cは子音、Vは母音をそれぞれ表す。弁別素性の省略形は、[cor] = coronal(舌頂性)、[son] = sonorant(共鳴性)を示す。音声記号は簡略表記を採用している。『沖繩語辞典』(pp. 39-41, 43, 47-50)によると、貴族・士族の成年男子では [i]、[e] の直前で [j] / [s]、全ての母音の直前で [tʃ] / [ts] / [t]、[dʒ] / [dz] / [d] の対立がそれぞれあるが、平民などでは全ての母音の直前で [tʃ] / [t]、[dʒ] / [d] の対立しかない。本稿では、/s/ [ʃ]、/s/ [s]、/č/ [tʃ]、/ts/ [ts]、/t/ [t]、/ž/ [dʒ]、/dz/ [dz]、/d/ [d] とする。また、[Qsi] / Qs-i / 〈して〉の [Q] は「標準語のつまる音(ツ)とほぼ同じに発音されるが、いっそう成節的である」(『沖繩語辞典』p. 46)とあるが、ここでは対象外なので具体的な音声は保留しておく。
- (5) 『沖繩語辞典』(p. 61)によると、[jumun] は首里周辺で聞かれるらしい。また、[jumjun] は古風な形としてあるとのことである。本稿では /yum- / 〈読む〉という基底形を設定しているため、[junun] は /m/ → [n] の交替によって派生され(どの程度自由変異(free variation)かは不明)、[jumjun] は規則(3)の適用が免れることによって派生されるものと考えられる。
- (6) 金城・服部(1959:333)によると、「/-'ju'n/ の代りに /-'i'n/ を有する形式も用いられる」とあり、男女差・世代差が関与するようである。ここでは、〈取る〉の所にのみ [iN] の付く形を書いておく。
- (7) [wara:n] のように語幹末子音 /r/ が削除された形が他にも見られるかどうか不明である。通時的には、母音語幹動詞が r 語幹動詞に移行する際の名残かも知れない。

- (8) 母音語幹動詞の r 語幹化がどの活用形で起き、どの活用形で起きないかは今の所不明である。少なくとも本稿で扱った活用形の中では、この「～しない」の形だけに r 語幹化が起こる（「～する」の形でも r 語幹化が起こっているとも考えられるが、結局は規則(2)によって /r/ が消去されるので、明かではない）。また、/r/ 挿入が文法のどのレベルで起こるのかも問題として保留しておく。
- (9) このグループには、語幹末子音の直前が /i/ で、しかも二音節以上の語幹を持つ r 語幹動詞も含まれるはずであるが、現時点では見つかっていない。もっとも、この場合、r 語幹動詞であるのか i 語幹動詞であるのかを区別する根拠はないと思われる。一音節の語幹を持つ動詞においては、r 語幹動詞では [çç] で現れ、i 語幹動詞では [ç] で現れるというように、音声的な違いが出るが、二音節以上の語幹を持つ動詞においては、どの活用形でも違いが出てこない。具体的に言えば、/?uki-/ <起きる>などの i 語幹動詞を /?ukir-/ などというように r 語幹動詞として扱っても、以下の分析では差し支えないのである。即ち、i 語幹動詞の内、一音節語幹の場合は r 語幹化が決定的な役割を果たすが、二音節以上の語幹の場合は r 語幹化が決定的ではない（r 語幹化していようが、していまいがどうでもいい）と言えよう。
- (10) /?irir-/ <入れる>などの動詞では、語幹の /ri/ の /i/ が何らかの規則によって削除されるのか、それとも辞書レベルで /?irir-/ ~ /?ir-/ の 2 種の語幹を持つ動詞とするのか、不明である。ただ、この活用形で、2 種の語幹の内 /?ir-/ が利用されるとすると、規則(9)に引っかかり、不適格な音声形が出力されるので、やはり /i/ を消去する音韻規則を仮定した方が良いかも知れない。但し、他にもこの現象が見られるかどうかは現在の所分らない。問題として保留する。
- (11) この規則の重要な点の一つである「語幹末母音または語幹末子音の直前の母音が /i/ であること」という条件に関しては、類似の現象が品詞の枠を超えて見られる。詳細は上村 (1972: 29) を参照のこと（但し、理論的背景は本稿とは違う）。また、【表 1】には二音節語幹動詞の例しか出していないが、三音節以上の語幹を持つ動詞には次のようなものがある。/?aaki-tan/ [ʔa:kitan] <割れた>、/?adati-tan/ [ʔadatitan] <搜した>、/?akihataki-tan/ [ʔakihatakitan] <はだけた>など（これらの動詞は r 語幹動詞として扱っても i 語幹動詞として扱っても良い。注 9 参照）。「～した」の形では、接辞初頭音は全て [t] で現れている。
- (12) /r₁/ は、/tur-/ <取る>など語幹末子音 /r/ の直前の母音が /i/ 以外の r 語幹動詞、及び語幹末が /ir-/ で、しかも二音節以上の語幹を持つ r 語幹動詞の語幹末子音を表す。/r₂/ は、/çir-/ <切る>など語幹末が /ir-/ で終わる一音節語幹を持つ r 語幹動詞の語幹末子音を表す。/i₁/ は二音節以上の語幹を持つ i 語幹動詞の語幹末母音を、/i₂/ は一音節語幹の i 語幹動詞の語幹末母音をそれぞれ表す。

【参考文献】

- 金城朝永・服部四郎 (1959) 「附、琉球語」『世界言語概説 (下巻)』
市河三喜・服部四郎編 研究社 pp. 307-356
- 国立国語研究所編 (1963) 『沖繩語辞典』大蔵省印刷局
- 松本泰丈 (1991) 「活用タイプの記述のために—奄美大島南部方言の動詞のばあい—」
『国文学 解釈と鑑賞』第56巻1号 至文堂 pp. 115-134
- 仲宗根政善 (1960) 「沖繩方言の動詞の活用」『国語学』第41集 国語学会編 pp. 51-73
- 鈴木重幸 (1960) 「首里方言の動詞のいいきりの形」『国語学』第41集
国語学会編 pp. 74-85
- 多和田真一郎 (1973) 「沖繩本島方言の動詞」『都大論究』第11号
東京都立大学国語国文学会編 pp. 76-88
- 津波古敏子 (1992) 「琉球列島の言語 (沖繩中南部方言)」『言語学大辞典』第4巻
三省堂 pp. 829-848
- 上村幸雄 (1972) 「琉球方言入門」『言語生活』No. 251 筑摩書房 pp. 20-37
- 内間直仁 (1970) 「琉球方言動詞活用の記述」『方言研究の問題点』
平山輝男博士還暦記念会編 明治書院 pp. 356-382
- 山田実 (1979) 『琉球語動詞の形態論的構造』国書刊行会

Morphophonology of the Regular Verbs in the Shuri Dialect: Preliminaries

Mitsuhiko Arimoto

Baiko Jo Gakuin Junior College

In this paper, I would like to analyse the regular verbs in the Shuri dialect from the Morphophonological point of view.

My standpoint is that language consists of the lexicon and the grammatical rules in various levels, as in the theory of Generative grammar. The differences of language are not only those of the lexicon but also those of the rules. My final purpose is to describe the latter in the Ryukyuan dialects. This paper is the preliminary one in order to achieve the purpose.

In the Shuri dialect, the conjugation of the regular verbs is described by a set of phonological rules. But the following problems remain:

- 1) Which is the language-universal rule? Which is the language-particular rule?
- 2) What contribute to the differences among languages; the differences of the environment of rules, or the differences of the number of rules?